

男女共同参画社会と市民活動（第二部）

—SWOSの会会員と学生との交流による意識変容過程—

コミュニティ福祉学科 志 田 倫 子

はじめに

2009年度から2010年度にかけて、静岡県で男女共同参画社会の啓発、推進を目的とする市民活動を行っているSWOSの会の会員（会員数166名）と、静岡英和学院大学の学生との交流が全8回にわたって行われた⁽¹⁾。本稿では、これらの交流の内容を概観したうえで、交流会を通して会員と学生との間に行われたやりとりによって、双方にどのような相互作用が行われ、意識変容を起していったのか、その意識変容過程についての分析を試みる。

SWOSの会の会員とは、男女共同参画社会基本法が形成される以前の1970年代に始めた活動（海外研修女性の会）が前身となっている男女共同参画に関する先駆者的な立場にある。それら先駆者たち世代が構築した社会を受け入れていく現在の学生世代が交流することによって、どのような影響を与えあうのかをみていきたい。

分析の際には、交流会が行われる前には学生と会員の双方がどのような印象を持っていたのか、そして交流会を通して双方がどのように変わっていったのか、そして現在の状況を踏まえた上で、今後の相互作用に求められるものについて考察したい。分析の方法については、H.ブルーマー『シンボリック相互作用論』、P.クラントン『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして—』といった相互作用論的アプローチを組み合わせる論じたい。

本稿の内容を通して、「男女共同参画社会の実現」に対する現状と課題、今回のような世代間交流を効果的に行っていく際に必要とされる点⁽²⁾などを提案でき、今後の男女共同参画社会の構築に役立てたい。

1 調査の方法

（1）交流会の内容について

交流会の内容は以下のように行われた。各回の主な構成員は、SWOSの会会員は役員（7名程度）、学生に関しては筆者のゼミ生⁽³⁾（10名程度）である。

第1回 顔合わせ、テキストを読む（2009年度前期、7月、於：静岡英和学院大学）

自己紹介をして顔合わせをした後、ゼミで輪読しているテキスト『ライフコースとジェンダーで読む家族』の1章を読み感想をいう。

第2回 施設内保育所見学（2009年度夏休み 8月、校外学習）

磐田市の（株）ロック・フィールドが行っている施設内保育所を見学に行く。

第3回 アンケート調査の意見交換会（2009年度後期、11月、於：英和学院大学）

大学生に対して行う「結婚観子育て観」のアンケート調査の内容について、意見交換会を行う。

第4回 アンケート調査の結果報告会（2009年度後期、1月、於：英和学院大学）

県内大学生1000人に対して行い集計した「結婚観子育て観」アンケートの結果報告会を行う。静岡新聞の取材が入る⁽⁴⁾。

第5回 卒論発表会（2009年度後期、2月、於：英和学院大学）

4年生の卒論発表会に参加する。

第6回 ワークショップ（2010年度前期、5月、於：英和学院大学）

「結婚観子育て観」アンケート結果報告書を用いて、ワークショップを行う。

第7回 あざれあメッセ（2010年度前期、7月、於：男女共同参画センターあざれあ）

あざれあで行われた祭典、あざれあメッセに学生が参加する。

SWOSの会が出したブースを手伝う。

第8回 活動の歴史について（2010年度後期、11月、於：英和学院大学）

SWOSの会の活動の歴史について話してもらう。

（2）インタビュー調査について

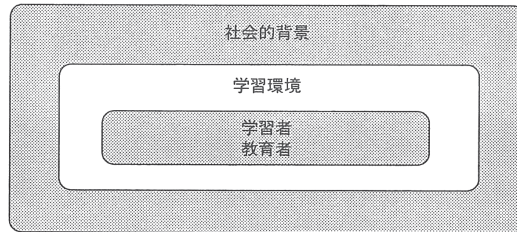
2011年10月に、「静岡県男女共同参画センターあざれあ（3F団体交流室）」において、SWOSの会会員に対するインタビュー調査を行った。交流会に参加した会員3名を含む6名の会員に集まってもらい、交流会について振り返ってもらい、座談会方式でインタビューを行った。

2 学習構造の枠組み

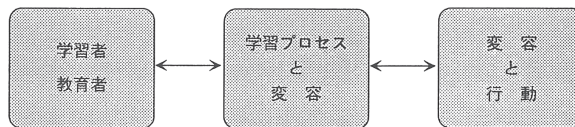
P.クラントンは成人教育について、次のように枠組みを設定している。分析の際に、この枠組みを用いたい⁽⁵⁾。

学習者と教育者はある学習環境の中でともに学習に取り組んでおり、その学習環境自体は、ある社会的背景の中に存在している。もう少し詳しく見てみると、これらの構成要素である学習者と教育者は、それぞれ独自の複雑な特性をもっており、さらにたえず変容プロセスが生じている。その変容プロセス全体をとらえると、図表1－2のようになるであろう。

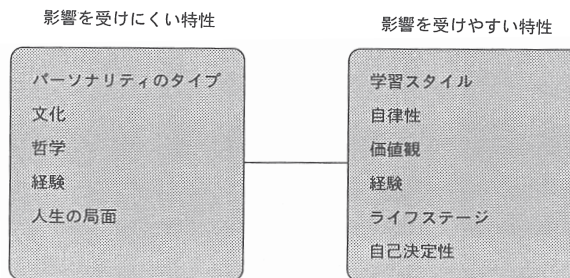
図表 1－1 学習活動全体のわく組み



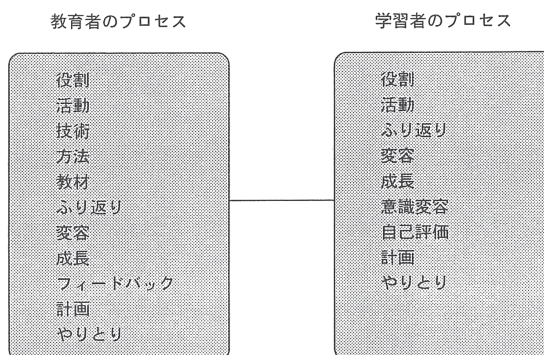
図表 1－2 学習活動のプロセスの概観



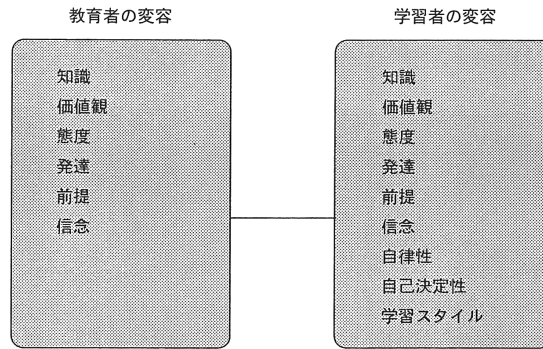
図表 1－3 学習者と教育者の特性



図表 1－4 学習・教育のプロセス



図表 1-5 変容と行動



学習者と教育者は、それぞれ独自の経験、特性、価値観、信念をもっており、学習プロセスの中でともに学習に取り組んでいる。学習プロセスには、プロセスの一部としての変容が含まれており、その結果として思考、価値観、態度、行動の変容が生まれる。

このような学習活動のプロセス全体は、ある学習環境や社会的背景の中で生じる。

図表 1-2 の学習者と教育者が入っているボックスを開けてみると、図表 1-3 のようになる。

概観すると、「影響を受けにくい特性」は学習プロセスに影響を及ぼすが、学習プロセスからの影響を受けることはあまりない。「影響を受けやすい特性」は学習プロセスに影響を及ぼすとともに、学習プロセスによって変化することもある。

「経験」は、両方のボックスに入っている。というのは、過去の経験それ自体は実際には変化しないのであるが、学習プロセスの中で新たな経験がつけ加えられたり過去の経験が再解釈されるからである。

「影響を受けやすい特性」と「影響を受けにくい特性」との関係に注目してみよう。例えば、哲学はあまり変化しなくとも、その中に含まれる価値観のいくつかは変化するだろう。また、人生の局面は変化しなくとも、ライフステージは其中で変化するかもしれない。

次に、学習プロセスの構成要素も、同じように細かく見ていくことができる。学習者と教育者はどちらも同じ学習プロセスを経験するのであるが、両者のかかわり方は異なっていると言える。図表 1-4 は、学習プロセスの構成要素をくわしく記したものである。

「学習・教育のプロセス」の中では、いろいろなことが起こる。教育者と学習者はさまざまな役割（共同学習者、専門家、モデルなど）を担い、さまざまな活動（グループワーク、ロールプレイ、読書など）に取り組む。教育者は技術や方法を実際に使い、通常は教材や情報を提供する。

学習者と教育者は、ふり返し、変容、成長にかかわる。教育者は学習者にフィードバックをおこない、学習者は自分自身の学習を評価する。また、すべての参加者は、学習プロセス全体を通じて学習計画にかかわり、お互いにやりとりをする。

最後に、学習プロセスの「結果」としての「変容と行動」を見てみよう。大きな意味では、はっ

きりと示される学習の結果や成果というものはない。なぜなら、学習の結果や成果はたえない変容と行動のプロセスになっており、さらなる学習や変容を引き起こすものであるからである。とはいうものの、多くの教育者は、はっきりとした目的や結果をもつワークショップ、講座、研修の枠の中で、学習活動に取り組んでいる。

図表1-5は、図表1-2の中の「変容と行動」のボックスを開けてみたものである。この図表の枠組みによれば、教育者と学習者はともに知識、価値観、態度、発達段階、前提、信念の変容を経験する可能性をもっている。

学習者のほうが、教育者よりも変容するであろう。しかし、学習者との相互のやり取りをとおして、またとくに共同学習者の役割をとおして、教育者もまた変容するのである。学習者はさらに、自律性や自己決定性においても変容をとげるであろう。

こうした枠組みを完全に当てはめることはできないが、この枠組みを活用するなかで交流会を通しての変容過程を分析したい。教育者（SWOSの会会員）、学習者（学生）の相互作用として分析が可能であり、会員に対する「振り返り」の機会の1つとして、交流会後のインタビュー調査を行った。その中で学生と会員双方の「変容」の過程をとらえ、いかなる「成長」がみられたかというプロセスを分析していきたく。

3 SWOSの会会員のインタビュー結果の考察

前述したように、SWOSの会会員に対してインタビュー調査を行い、交流会を振り返ってもらった。本節では、そのインタビュー結果を載せた上で考察を試みたい。登場する会員はAさん、Bさん、Cさん、Dさんである。A～Cさんは、交流会に参加して学生と交流を果たした役員である（そのうちA、Bさんに関しては交流会のほとんどに参加した中核的メンバーといえる）。

（1）～（2）では、「教育者」としてのSWOSの会の会員が、「学習者」としての学生をどのように見ているのか、インタビュー調査の結果を用いて分析したい。

（3）～（4）では、会員自身のことについて、入会に至るまでの経緯と、学生と交流した後の変化についてインタビュー調査の分析を試みる。

（1）交流会前の印象

まず、交流会前の印象について、どのような印象を抱いていたか、会員に伺った。

Aさん：これまでは、同じ世代の人との活動が多かった。大学生は孫までとは言わないけれど、異世界の人。ジェネレーション・ギャップがあるのではないか？と思った。

Bさん：大学生との交流、そのものは魅力があった。

この交流会で大学生と交流する未知の経験に対して、期待と不安を抱くものの、取り組み自体に対しては積極的にとらえている様子がうかがえる。

（２）交流会を通しての印象

①学生と接したことで変化した印象について

次に、実際に交流会で学生と接してみて印象が変化したか会員に伺った。

Bさん：（学生世代には）男女平等が当たり前のことかなあと思った。そういうのは浸透していなかった。（大学生の）親世代の影響かとも思う。今どきの学生も、私たちの学生時代と変わっていない。「今の時代だから、職業をもってやっていきたい」そういうことは感じられなかった。

学生そのものの印象は、最初から予想と違っていた。意外と若い世代に意識が薄いことがわかった。しかし、男女共同参画を若い世代にどう取り込んでいけるのか、きっかけがつかめたのはよかった。

Cさん：男女共同参画のゼミなのに、「結婚して仕事をやめたい」と答える学生が多いのには驚いた。社会に甘えているのではないか。しかし、男子で、「主夫（しゅふ）になりたい」と言った人がいたのは、時代の影響かと思い新鮮に感じたが驚いた。

SWOSの会の会員は自分たちの学生時代とは、時代が違うのだから、男女共同参画について意識が進んでおり、現在の学生は積極的な興味関心をもってゼミに臨んでおり、自分たちと対等に意見を交わすような状況を期待していたようだが、その予想は裏切られたと感じたことがわかる。

②交流会を通して気づいた学生の変化について

最初は期待を裏切られるように思えた学生の言動が、その後どのように変化したと感じたか伺った。

Aさん：1番最初に「家族」の本を読んだ。学生はあまり意味が分かっていなくて字面だけ追っているように思った。しかし、個人差があり成長が見られた学生もいた。

（ゼミ生G君について）最初は特に印象に残らなかったが、（第2回交流会の）施設内保育の見学に行ったときに「子どもとの接し方がいい」ことに気付いた。その後、秋に会ったとき（第3回交流会のこと）には一皮むけてきた。私が挨拶をしたら、自分から（Aさんに）話しかけてくるなど変化が見られた。（卒論も「労働とジェンダー」というテーマで書くなど、SWOSの会との交流の影響がみられる。）就職も自分の好きな道を見つけられて（特技を生かした就職先を探すことになって）いいと思う。

（ゼミ生Tさんについて）施設内保育の見学に行ったときに「子どもと接することができず、突っ立っている」ように思った。その後もあまり成長は見られないように思った。こんな風に、何人かが変わったと思う。

Bさん：アンケートの結果報告会（第4回交流会）からみると、ワークショップ（第6回交流会）のときには男女共同参画について考える姿勢が見られるようになったように思う。交流会を通しての変化は、自分たちの考えを人前で話し、前に出すようになったと思う。最初（第1回交流会）に

「結婚したら自分の奥さんには家にいてほしい」と答えた学生も、その後（第6回交流会）発言に変化が見られ「相手の気持ちを尊重」となっていた。

Cさん：（男女共同参画について）考えようと思うようになったんだろうなあと感じた。（第1回交流会で）最初に読んだ本も自分と結びついていなかったけれど、（第4回交流会の）アンケートの結果をみて、考えないといけないことなんだとわかったように思った。

Aさん：就職、就職と（親は）言わないのであろう。学生は親に食わしてもらうことが、これからも続くと思っていた。交流会を通して、男女共同参画や働くことに気づかされた。

（学生は専業主婦になりたいと言っている）実際のところは、両親働いていて祖父母がいるなどの家庭も多かった。「両親は働いているため、3姉妹で家事を分担している大変で嫌なので専業主婦志向だが、（交際）相手は今のところいない。」と言う学生もあり、戦後の女性が専業主婦に夢を抱いているような姿を現代でもなぞっているような印象をうけた。

最初は期待に反するような学生の言動であったが、交流会を通して「発達段階の変化」を感じている。個人差があるものの、これまでテキストの内容について意味がわからないまま読んでいた段階から、自分の問題と結び付けて考えるようになった変化。あるいは、これまで自分の意見を言うことがなかった段階から、人前で意見を発言できるようになった変化。その意見（専業主婦になりたいなど）を口に出すことで反論され、そこで自分自身の考え方を振り返ってみる変化などがみられる。そのほか、交流会開始の時期から意識の高い学生に関しては、自ら会員に話しかけるなど興味を深め、卒論のテーマで取り上げたり、自分自身の就職に結びつけたりする変化につながっている。こうした学生の「変化」を成長ととらえて受け止めている。

（3） 男女共同参画社会に目覚めてSWOSの会に参加したきっかけについて

一方、SWOSの会の会員についても、入会に至るまでの過程があるのではないと思われる、その経緯を伺った。

Bさん：良妻賢母教育を受けるような学校を卒業した。農家に嫁ぎ、夢と現実のギャップ（嫁への差別的待遇）に驚いた。そこで、海外研修女性の会に応募し、海外研修に出かけ、目覚めた。諸外国の男女共同参画を目にして驚いた。その後、SWOSの会として啓発活動に励む。しかし、現代の若者は、自分と同じことを繰り返すのではなく、折角、男女平等という世界が開けているのにもったいないと思った。出来る環境にいながら、しないのは驚く。制度が変わるなりしないと、大きく変化しないのではないかと。男性は特に変わらないと思っている。

Cさん：私は、もともと男女関係なく働くと思っていた。

Dさん：神奈川県から静岡に転勤してきて、静岡は20年遅れていると驚く。PTA会長は男ばかりだった。

Cさん：他県の新聞社に勤めていた。夫の転勤で静岡へ来るが、社会部はダメで学芸部に行く。新聞社は親元から通っている女性をとった。自分は東京の大学に通っているから何社か落とされた。結婚して夫の転勤についていくようになった。静岡まできて、もう動きたくないと腰をすえることにした。

Dさん：民間の放送局に勤めていた。就職のときはコネだった。熊本の放送局にいたが、結婚して東京→神奈川→静岡と夫の都合で転勤している。種をまいたかと思うと転勤の繰り返しだった。

Bさんは、良妻賢母教育を学校で受けて、結婚して現実を目の当たりにしたことで男女共同参画に目覚めている。すなわち、Bさんは自分自身の体験から、今の学生がもどかしいと感じている。折角、男女共同参画が推進されている時代なのに、今の学生の意識は、自分が学生時代に思い描いていたものと全く同じだということに気づき、同じことが繰り返されることに危機感を抱いている。そして、Cさん、Dさんが男女共同参画に目覚める背景には、夫の転勤について歩くだけの寂しい日々、種をまいたかと思うとまた転勤といった日々がある。また、Bさんは、農家の嫁として嫁いだ苦しみといった生身の人間としての感情が通っている。

今回、こうした生身の人間としての経験を学生に赤裸々に話す機会がなかったが、このような入会に至るまでの過程を話すことで、学生と経験を共有することができたのではないかとと思われる。

（４）学生との交流を通して会員の意識の変化について

学生との交流を経て、会員の皆様の意識の変化や活動の変化が見られたかを伺った。

Bさん：現在は、男女共同参画について、劇を通して啓発しようという活動を行っている。身近な人たちにわかってもらいたいが、上から目線で言っても駄目だということがわかり、劇をやるなかで言いたいことを伝えようと考えようになった。これは英和生との交流のおかげである。

劇の内容は、経験をもとに、例えば茶の間でおばあちゃんが自分の娘と嫁に言うことが違う（娘には寛大、嫁には意地悪）などの話の内容となっている。あるいはアンケートの結果をいかし、「自分の産んだ子は預けないで自分で育てたい」という学生の姿をあらわすような内容が会話に組み込まれている。

会員のほうも、学生との交流を通して、相手の目線で話をする必要性を感じ、実践に結び付けている。

4 学生が抱いた印象

一方で、学生達はSWOSの会の会員との交流をどのように受け止めていったのであろうか。学生にはインタビューといった形では話を聞いていないものの、会話の中から得られた内容を要約したい。

学生からみると、会員たちは世代も離れているが現代と就職事情も違うため「（社会の）上のほうにいる人たち」という印象がもたれているようであった。自分達は不況の中で、生きるために男女を問わず働く時代に生きているが、（新聞社、放送局など）憧れの仕事について、結婚後仕事をやめ、SWOSの会のような地域活動をして生活できる存在がむしろ羨ましいと感じているように思われた。

学生が「専業主婦になりたい」という背景には、むしろSWOSの会の会員に対する敬意が含まれていたのかもしれない。

このようにSWOSの会の会員が学生に抱いた印象と同じように、学生にとっても異世界との交流、カルチャーショックだったのではないかと思われる⁽⁶⁾。

5 今後の相互作用に求められるもの

今回は交流の機会は全8回と少なくはなかったものの、回数は限られていた。そこで、双方の相互作用による成長はみられたものの、課題もいくつか残された。そこで、世代間のギャップを埋めて意識啓発を効果的に行うために、今後相互作用に求められるものを何点かあげてみたい。

（１）アソシエーションを根付かせる工夫

SWOSの会の活動は目的意識の強いアソシエーションであるため、「男女共同参画についての意識啓発を行う」という明確なねらいがある。しかし、意識を根付かせていくためには、コミュニティの中で人間関係を深めていくように、まず一から関係を深めていくことが大事ではないかと思われる。

すなわち、今回の交流会においては、初回の自己紹介は簡略的なものであっても途中で仲を深めるような親睦会のようなものを持つなどの工夫が求められよう。

（２）学生の意識変容に働きかける態度

これまで考察してきたように、学生の意識変容は、発達の段階によって違いがみられることに気づかされた。しかし、どの学生に対しても効果的と考えられるのは、会員が「入会に至るまでの経験を話す」、「当時の職業についての話を語る」という２点と思われる。こうした２点を組み入れた場合に考えられる学生の意識変容の過程について考察したい。

①最初の印象

会員に対して、「（社会の）上のほうにいるひとたち」という漠然とした印象をもっている。

②一個人として身近に感じる

次に、会員を身近に感じる機会が必要とされよう。そこで必要なのは、会員が「入会に至るまでの経験を話す」ことではないか。男女共同参画に目覚める背景には、「夫の転勤について歩くだけの寂しい日々、種をまいたかと思うとまた転勤（Aさん、Dさん）、農家の嫁として嫁いだ苦しみ（Bさん）」などの生身の人間としての感情が通っている。こうした経験を話すことで、「（社会の）上のほうにいる人たち」が身近な存在になるのではないか。

それと同時に、「当時の就職についての話を語る」ことも求められよう。新聞社や放送局といった仕事自体に、あまり馴染みがないため、こちらも「（社会の）上のほうにいるひとたちがなる仕事」というイメージをもっているように思う。このような職業についての初歩的な説明があり、当時の職業事情（コネで採用されることも多く、女子は結婚すると仕事をやめたことなど）を話すことで世代間のギャップが埋められていくのではないか。

③共感の気持ち

一個人としての人間性が明らかになる中で、会員に対する「共感」の気持ちが生まれてくるであろう。すなわち辛い経験をして「可哀想」といった感情が湧きあがり、痛みを話してくれたことで、自分の身近な人となったSWOSの会の会員の方々の救済としての男女共同参画に関する施策（男女雇用機会均等法など）に目を向けることができるのではないか。

④自分につなげる

次に、男女共同参画の問題を自分の問題としてスムーズに考えていくことができるのではないか。ここで初めて、雇用における平等の大切さなどがわかるのではないかと思われる。

⑤一般化された他者

学生はSWOSの会の会員を通して、まだ経験のない社会人としてのありようを想像することになる。社会人という「一般化された他者」は、SWOSの会の会員との交流によって培われる部分が大きい。

そこで改めて、「入会に至るまでの経験」や「職業についての話」をすることが、男女共同参画に関する意識啓発に重要となると強調できる。

（３）継続性について

第３に、相互作用の継続性が重要と思われる。一度働きかけをした時の反応が鈍くても、あきらめない気持ちが大事ではないか。一度で心に残る啓発活動のインパクトも効果があると思うが、ゆるい坂を登り続けるように、先駆者たちの世代が若い世代にエールを与え続けるような関係の中で、男女共同参画に関する意識が根付いていくように思われる。

おわりに

本稿では、本学の学生と、男女共同参画社会の意識啓発を行う地域活動団体SWOSの会との全

8回の交流を通して、双方の意識変容の過程を概観する中で、男女共同参画を取り巻く現状や課題を浮かび上がらせた。

今後は、さらに精緻化された分析枠組みを用いて、活動のもたらす効果や影響について分析を継続していきたい。

(注)

(1) これらの交流は、本学地域協働推進機構による補助金をもとに行われた。

(2) 男女共同参画社会を目指す啓発活動に、若い世代で入会するものが減っており、世代間の意志の疎通が今日の課題となっている。

(3) 筆者のゼミが「家族社会学・男女共同参画」をテーマとしているため、ゼミ生との交流を行った。

(4) 以下の記事が掲載された。

[illegible]

(5) P.クラントン (1999)、p27～p32を中心にまとめる。

(6) 学生は、手探りながら会員との交流の意味を探っていった。就職はエントリーシートを使う時代、以前とは違いコネが通用することは少ないが、卒業論文で「労働とジェンダー」という内容を選び、男女雇用機会均等法前の男女の労働の有りようを探った中で、当時の女性の就職について理解した者もみられた。あるいは、こうした影響があつてか、地元テレビ局に就職した学生もみられた。

(主要参考文献)

- ・ H.ブルーマー1992『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法—』勁草書房
- ・ Mezirow,J. and Associates, "Fostering Critical Reflection in Adulthood : A Guide to Transformative and Emancipatory Learning"Josse Bass Higher and Adult Education,1990
- ・ P.クラントン(入江直子ほか訳)1999『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして—』鳳書房